

令和4年7月1日発行 春燈/第77巻第7号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物承認

# 春燈

2022 July

7  
月号



## 成瀬櫻桃子の句

### 夜の辛夷一花一仏眠るかな

「春燈」平成九年

辛夷は早春、葉に先かけて芳香ある白色六弁の花をつける。暗黒の夜の帳の中、花弁を閉じて直立する白い花一つ一つに「仏在す」と見立てたのは、信心深い環境に育たれた先生の内なる仏心の発想と思う。句会でこの句を目にした時、真つ先に印を付けたことを思い出す。

先生の著書『古寺散策』には仏像を詠まれた句が数多あり、座右に置いて勉強させていたたいている。

尾野奈津子

## 成瀬櫻桃子の句

### 人麻呂のぢんぢんばしより植ゑし田か

『素心』昭和五十六年

前書に「飛鳥の里」とある。田植の済んだばかりの田。そのすがすがしい景にふと、じんじん端折り姿の柿本人麻呂を浮かべる師。古代、田植は神聖な行事であったという歴史上の事実。万葉歌人に思いを馳せるのは自然であり、安らぎのいつときであったように思える。

著書『古寺散策』の中で、探訪地における仏像や周辺の風物を詠むことの意義深さを述べている。

平沢恵子

名誉主宰 安立公彦

主宰 鈴木直充

ひとときの勿忘草の香りかな

奥山の奥にまた山別れ霜

行く春を水の流れに惜しむ日や

本棚の古書のかをりや菜種梅雨

去りゆくは時のみならず春の夢

締切の迫りたる稿藤揺るる

四月尽ことに夕日の彩ゆたに

春の雷湯あがりの身の置きどころ

咲き初むる藤に遅速のなかりけり

ゆく春の匣をはみだす首飾り



## 燈下集



○ 深川敏子

初蝶や手を上げ渡るランドセル  
体育館横自転車置き場卒業す  
囀やアールグレイのジャンピング  
孫娘と同じ母校や初桜  
コロナ禍に二年も会へぬ花の雨

○ 尾野奈津子

思ひ出は遠のくばかり朝ざくら  
瀬戸内の名なき入江や若布干す  
蝌蚪群れて内緒ばなしを始めけり  
春の闇とろりと風のなまめかし  
しなだれて鯉と戯る柳かな

○ 小嶋恵美

○ ト部黎子  
残る鴨波間に孤影ただよはす  
能筆な風にのりたるちるさくら  
温暖化の地球を憂ふ桜守  
葱坊主脳の萎縮はひとごと  
うぐひすの余韻窓辺のカプチーン

○ 小嶋恵美  
世に疎き人に咲け咲けチューリップ  
春日傘ほどよき距離の会釈かな  
山吹やあかるき空のきのふけふ  
蜜蜂の遊び疲れて戻る箱  
古賀メロディーこころに唄ふ春炬燵

○ 三宅文子

小町忌の鏡の齢を取りにけり  
夕されや八十八夜の水明り  
あをによし奈良東大寺馬酔木咲く  
ぼつてりと咲いて暗きや八重桜  
卯の花月南部鉄瓶湯の甘き

○ 青柳雅子

たまゆらの桜薬ふる段葛  
清明や父に習ひし筆づかひ  
春の卓ミモザサラダを真ん中に  
サラサーテの謎の声聞く百閒忌  
ツイゴイネルワイゼン音量あげて春逝かす

○ 木多芙美子

鯉の生む大き水輪や仏生会  
朝桜茶粥に塩をひとつまみ  
走り根の行先いづこ花の雨  
風と来る祭囃子の乱打ち  
水鏡して古塔とされ桜かな

○ 小張志げ

空也像題目を吐く涅槃西風  
古茶新茶聞き上手ぬて聞き下手も  
桜薬降る別れるときめ逢ひにゆく  
林泉の鯉を遊ばせ作り滝  
灌壺の石の動きを見てをりぬ

○ 江草礼

紫木蓮選択肢なき余生かな  
花の雨夢一つなき目覚かな  
先斗町にはか舞妓に花の散る  
弁慶橋濠のよどみや八重桜  
もらひ欠伸こらへる涙鳥雲に

○ 岩永はるみ

新主幸迎ふる良き日藤かをる(浅草四句)  
句碑の字の小さきいろはや春落葉  
行く春の句碑に触れたるたなごころ  
傘雨忌の川風いなす青簾  
かるやかに続く師系や新樹光

○ 林紀夫

菜の花や内房線の固き椅子  
せせらぎや落花の中を急ぎたる  
花筏縄電車より子らの声  
遅桜空井戸のぞく男かな  
省みる老いの一徹遅桜

○ 武田巨子

花冷や利休好みの釜の肌  
ほぐれゆく言葉の角や月おぼろ  
黝々と光る櫛目や春田打  
振仰ぎ振りかへり見るさくらかな  
逝く春や師の句碑越しの海の青

○ 栗原完爾

風待ちのタンポポの絮揃ひけり  
迷惑ふ逃水国道一号線  
父の書に朱入れのおほし啄木忌  
アルバムは亡き人ばかり竹の秋  
少年が屋根塗つてゐる遅日かな

○ 諸岡孝子

スカーフを上衣代りに花衣  
手びさしに草の香のたつ花菜道  
シテのこ糸闇より出づる薪能  
妻恋のかかる激しさ夜の雉子  
いつの間の足弱組や青き踏む

○ 本多遊方

苗木植う「備長炭」に成る木とや  
たんぼぼの絮やポップ・デイルン是不滅  
猫の墓雀隠れとなりにけり  
茶摘して季節のずれを修正す  
八十八夜水遣り後の俄雨

○ 小泉三枝

白木蓮手燭明りとなる夕べ  
桜薬追悼文のやうに降る  
指先に鉛筆まはし春惜しむ  
野遊や男の子はなべて棒を持つ  
行く雁や祖国追はれし民の列

○ 平野加代子

八重桜こし方の影重ねけり  
花吹雪そのひとひらのやうに生き  
人間国宝撥際やかや春深む  
美術展のベンチに春を惜しみけり  
遠き戦地へ続く蒼穹春逝けり

○ 田嶋洋子

八十八夜茶畑よりの富士の峰  
上り鮎早瀬の光散らしけり  
子のレシビ通りに作る桜餅  
花筏川音深く沈ませて  
花陰に集へる日和三世代

○ 菅澤陽子

茅葺の山門くぐり山つつじ  
父の字の残る表札風光る  
花菜漬父母に声かけ供へけり  
行く春や仕掛時計の楽士たち  
武具飾る戦なき世を祈りつつ

○ 金山雅江

囀や傘雨の句碑の流れ文字  
新樹光声よき主宰誕生す(祝)  
玻璃戸ごしに姉と会話す山椿(箱根なごみの郷)  
桜蔭降る掃きても消えぬ恋心  
惜春や良きメンバーに恵まれし(青山短大最終会)

○ 太田佳代子

茎に生ふ産毛に春の風吹けり  
行く春や石のくぼみの水溜り  
春愁を振りきる歩みの速さかな  
まつすぐに見ゆる道ある暮春かな  
誰かしら帰るまで吹くしやばん玉

○ 久保久子

花冷や箆筒の底に母の文  
洩れやすき内輪の話紙風船  
榛の花ひかり充ちたる湖国かな  
唄ふがに野川の水音芹香る  
水音を背に木曾の春惜しむ

○ 廖運藩

青き踏む老いの足取おづおづと  
青き踏む歩みののろい煙草人  
春眠し野良の酸素の無尽蔵  
水牛の蹄跡深々春の泥  
花吹雪総身に浴びる風の道

荒井 慈

○ 久米憲子

行く春の風は何色さくら色  
初蝶や身の丈に合ふ高さまで  
願ふしか祈るしかなし黄水仙  
リラ冷や戻れぬ過去へもどりたし  
藤の花見頃のがしてしまひけり

佐渡谷 秀一

小倉 陶女

ぬかるみに足とられけり仏生会  
御神木の高き梢や鳥の恋  
すれちがふ人に見覚え春日傘  
囀の大樹はなるる一羽かな(憶)  
思ひ出し笑ひに春を惜しみけり

沼田 桂子

チューリップに吸ひよせらるる吾は蜂  
山吹の忽とあらはる黄色かな  
花のひとつとひとつの春惜しむ  
公園や渦巻き踊る花吹雪  
勿体無いやうな青空春惜しむ

# 余言

鈴木直充

哲人のかほして虻の来りけり

三上 程子

虻は翅が二枚しかないが、猛スピードで羽搏いて飛ぶ。また高周波の羽音をたてて宙にとどまる芸当を見せる。

作者は、虻が飛んで来て宙に停止しているとき、まじまじと虻の顔を見詰めたのであろう。そして、虻も作者の顔を見ている。互いに生きとし生けるものであり、この瞬間の「生」を共有しているのだ。虻が哲人のように見えたということは、作者も虻の眼にきつと明哲な人と映ったのではないだろうか。

戸車のやたら軋むや猫の恋

木村 傘休

発情期の動物の雄は、それぞれ特有の鳴き声を発するが、人の身近にいる春の猫の声は耳について離れない。赤ん坊の泣くような、布を裂くような面妖な鳴き声が夜昼となく

はこの目を目安にして種時きや茶摘みをするのである。

作者は、立夏を目の前にした八十八夜の日に庭木や鉢植えに水遣りをした。空は明るく夏めいていて、木々は水を求めている。たつぷりと灌水してさつぱりした木々にゆくりなくも俄雨が降った。木々は作者の慈しみの水を受け、さらに八十八夜の甘雨を受けて緑を輝かせたのであろう。

思ひ出し笑ひに春を惜しみけり

小倉 陶女

「思ひ出し笑ひ」は、独り笑いである。春の心地よさの中にいる作者は、他愛のないことを思ひ出してクスツと笑った。例えば、亡き方の生前、ちよつと意地悪をしてしまった時、相手のこまった表情やとまどいの言葉が蘇ってきて、体の中から笑いが浮かび上がってきたのだろう。

人は誰かに何かをされたことよりも、自分が行ったあれこれを意外に覚えている。また、思い出が多いということ、長く生きてきた証左である。「春を惜しみけり」に作者の人生に深くかわつてくれた人達への感謝の念が込められている。そして「思ひ出し笑ひ」の措辞は、作者はいつでも大切な人と繋がっていることを示している。

浅草一丁目一番地暮春

矢口 笑子

どこの町にも住居表示がされていて「一丁目一番地」がある。ところが「浅草」となると一句の景が大きく広が

聞かせられるのだから堪らない。かてて加えて、作者が家の戸車を繰ったら恋猫の声に呼応するようにガタガタ、ギシギシと軋んだのである。

和歌の世界では鹿の鳴く声に雅を感じて歌材にしたが、猫は俗なるものとして詠まなかつた。また、生活感を伴う戸の軋む音も低俗なるものとして詠む対象にしない。しかし、この句は恋猫の叫びと戸車が軋むノイズの不協和音を捉え、現代の斬新な俳諧に仕上げたのである。

桜薬降る別れるときめ逢ひにゆく

小張 志げ

染井吉野は満開になると一気に散ってしまう。落花のあとの枝には桜薬が残るが、これもまた息せき切ったように降りしきるのである。

この様子を見ていた作者は、悶々と悩んでいた一事にふんざりがつき「別れる」と決めたのだろう。けれども、「別れる」と「逢ひにゆく」という逆説のフレーズに愛の「残り火」を感じるのである。この句は、複雑な恋心の髪を描きだしている。

八十八夜水遣り後の俄雨

本多 遊方

八十八夜は、立春から数えて八十八日目の日を言う。中国由来の二十四節とは別に日本で独自につくられた雑節である。「米」の字を分けて書くと八十八になるので、農家

くる。浅草は江戸時代以降、武士や商人が集まり、人物・金の渦巻く経済と遊樂の地となった。

ところで、久保田万太郎先生は浅草に生まれ育ち、小説・戯曲・俳句で浅草の下町情緒をバックボーンにしたさまざまな人間模様を描いた。「一丁目一番地」は、いわば表通りだが、下五に据えられた「暮春」から万太郎句の「海瀛打ちの廓ともりてわかれけり」のような観音裏にあつた吉原遊郭の風情も見えてくる。春の夕暮、海瀛打ちを切り上げた万太郎少年は、吉原の大人の異界の灯火に甘酸っぱさを感じていたにちがいない。

桜薬降る貫はれてゆくピアノ

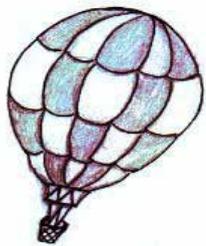
宮崎 洋

ピアノは親が大奮発して子どもに買い与えたものだろう。楽器の王様といわれるピアノが届いた日の子どもの喜びようと両親の誇らしげな姿が見えてきそうだ。その日から、家からピアノを弾く音が洩れ聞こえるようになり、子どもは成長と共に上達してゆく。ところが、子どもが学業を終え、就職するとピアノに触れる機会がめっきり減ってしまう。そして結婚して家を出てゆくとピアノは居間に取り残されてしまう。

桜薬が降る日、ピアノは他所の家に貫われてゆくことになった。車の荷台のピアノに桜薬が降り、この家の歴史の一幕が閉じられようとしている。

# 当月集

鈴木直充選



○ 水谷 甚

巢燕に軒を許して娶りまだ  
ひそとしかと万太郎句碑春灯下  
虐げて履くスニーカー五月来る  
父と子の蹴り合ふボール芝青む  
春宵の録画しておくヒッチコック

○ 重実ひとみ

あかときにわきでて梅のひとつづつ

○ 立 竹人

桃間引く厨へ落とす花の薬  
蔵採り市へ出さむと束ねをり

逆光にひとときはつよく梅ひらく

夕食の後覚えなき目借時

ともかくにも雨ふる雀隠れかな

春昼やいつも遅れてゐる時計

硬貨一枚雀隠れにおとしけり

若草にハンカチ敷いてくれしこと

永き日の波音はいつしづまれる

○ 辻 泰子

○ 種田 利子

鳥の目で見たき桜の飛鳥山

戦争の愚を知る日本さくら咲く

晚香廬の玻璃の清らかさへづれる

早く治れと言はるる幸や春の風邪

遠近法の桜並木や段葛

母の苦勞偲びて拝む昭和の日

初夏の波さはさはと渡りけり

利休梅ひと枝活けてお茶にせむ

青蜥蜴左右睨みて消えにけり

雨止めばどつと輝く柿若葉

# 春燈の句

鈴木直充選



千葉 小山 閑人

せせらぎに身をふるはせて露の臺

開放つ納戸は燕の通りみち

青空を白木蓮の突き上ぐる

聞こゆるは瀬音ばかりや夕朧

春の夜の雨あがりたる句かな

百齡の木霊を秘むる新樹かな

朧なる夜気震はせて遠汽笛

谷川の流れを速め夏兆す

行列と見れば並ぶや蝶の屋

生きて来し御世遙けしや昭和の日

ブティックの店主の笑くば燕来る

花は葉に小庭なれども季節来る

春風や好投止まぬダルビッシュ

ぼうぶりの育つや鉢の溜り水

春光や完全試合見事なる(佐々木明希選手)

と見かう見して駆け出せる蜥蜴の子

夢浮かぶ笑顔の母や母の日に

ひと握りの童を摘んで啄木忌

孝行の足りなさ悔ゆる母の日は

鉄棒もジャングルジムも花の下

ふらここを漕ぎてこの世を遠くせり

朝寝して母の声きく里帰り

囀のそれぞれの声聞分くる

「今朝採り」と添へて呉れけり若若布

今年早五人の逝きて星朧

京都 村上 國枝

埼玉 櫻井 理恵